

低温に対応した当面の農作物の管理について

平成22年4月13日
山形県農林水産部

1. 果樹

(1) 防霜対策とおとうの結実確保

発芽期～開花期にかけては最も低温に弱い生育ステージになるため、各樹種とも防霜対策には十分留意する。

特に、今年は、低温に加え日照時間も少ないため地温が上がりにくい傾向にあり、例年以上に霜害の危険性が高い。このため、万全な防霜対策を講じるとともに、人工受粉等を徹底して結実確保に万全を図る。

①防霜対策

- ・燃焼資材の準備は怠りなく進めておく。(低温解消後、天候が回復する際に強い霜が降りやすいので、十分に注意する)
- ・敷きわらなど地表面を覆うものは、霜害を助長するのでかき集める。

②おとうの結実確保

- ・5分咲き、8分咲き(満開)の他にも、天候の良い日には毛バタキ受粉を行う。
- ・受粉樹が少ない園地では、受粉樹の切り枝を水差しして利用する。
- ・訪花昆虫の活動促進のため、園地周囲に防風ネットを設置する。(ミツバチの訪花活動のためネット下部に空間を空ける)
- ・開花期間中に低温や頻繁な降雨が予想される場合は、開花始期から雨よけを被覆し(早期被覆)不順天候下でも受粉できるようにする。

(2) 施設栽培における適正な温度管理

この時期は寒暖較差が大きい時期でもあり、高温・低温ともに注意する必要がある。

①おとうハウス栽培

- ・低温時はハウス内の湿度が高まり裂果が発生しやすくなるので、常時送風を行ったり、加温換気を行い裂果防止に努める。
- ・好天時は高温による着色遅延、ウルミ発生防止のため、早めに換気を行い、ハウス内の温度を28℃以下に管理する。

②ぶどうハウス栽培

- ・生育ステージに応じて、適正な温度管理を徹底する。特に、低温時の保温管理や高温時の換気に留意する。

(3) 病虫害防除

今後開花期を迎える樹種では、開花期前後の低温、降雨が予想されるので、適期防除を徹底する。

- ・おとう:灰星病(花ぐされ)、幼果菌核病
- ・りんご:モニリア病、黒星病
- ・もも:灰星病(花ぐされ)
- ・日本なし:黒星病

2. 水稲

(1) 育苗時の温度管理と水管理

- ・播種は、地域ごとの適期に行うとともに、育苗ハウス内の温度管理、水管理に注意し、健苗育成等の基本技術を着実に実行する。

3. 野菜・花き

(1) ハウス、トンネル栽培の温度管理と霜害防止

- ・ハウス栽培では、早めにハウスを閉め、内張カーテンやトンネルで保温を図る。
- ・トンネル栽培では、放射冷却が著しい場合、トンネル内の気温が外気温よりも低下することがあるので温度の高いうちにトンネルを閉めるとともに、不織布やこも、キャップ等を設置して霜害の軽減を図る。また、生育状態や気象条件によってトンネルの換気量を調節する。

(2) 野菜の定植

- ・すいかやメロン等では、定植予定の7日以上前にマルチを張り、地温を高めておく。定植は、地温が15℃以上であることを確認して、温かい風のない日を選んで行う。

(3) 花きの定植、低温対策

- ・きくの7月、8月出し露地栽培では、天候が回復し地温が上昇してから植え付け、生育初期はトンネル被覆を行う。